

平成25年度 学校評価(自己評価)報告書

附属幼稚園

		評価単位	評価のまとめ
教育課程	1. 教育目標		○幼児の生活全般を捉えたものになっている。 ○今後も年度初めに教育目標を見直し、共通理解が図れるようにしていくとよい。
	2. 教育課程の編成		○研究テーマである「探究力」を子どもたちが発揮するような実践を行った。 ○保育の前提となっている学びの概要を実践に照らし合わせて丁寧に見直していくことを重ねていきたい。
	3. 年間授業日数・回数		○年長児は2学期の短縮保育から降園時間を15分延長したが、改めて年間を振り返り、保育時間については丁寧に検討したい。 ○今年度は大規模修繕の関係で変更(減少)を余儀なくされたが、保護者に説明する機会を重ねて、理解と協力が得られた。
	4. 教育活動とその成果		○朝会や拡大打ち合わせ会で、各学年の情報伝達が定着した。 ○拡大打合せは非常勤講師との連携を図るのに有意義なので回数を増やせるとよい。 ○年長は改修工事の関係で、遊戯室での2クラス合同の保育になり、例年以上に連携して保育に当たることができた。
	5. 行事		○今年は、大規模改修の関係で新たな行事も加え、より良くなったこともあった。丁寧に振り返り、行事の持ち方や何を大事にすべきかさらに検討していきたい。 ○2学期終業式は、例年とは違う形でもたれたが、こういう年があってもよい。
	6. 進路指導		○例年よりも早い段階から進路選択の意味を伝えてきた。今年度の進路指導を振り返り、次年度どのような見通しで進路指導をするか教師間で共通理解する必要がある。 ○保護者の対応は早い時期から行い、子どもたち一人一人にとって適した進路選択の幅が広がっていくように対応したい。
	7. 研究・研修		○「道具」を切り口に多くの事例を出し合い、研究が深められた。 ○研究会に大学教員に参加してもらう機会が増え、研究の深まりにつながった。 ○接続期の学びの概要について、園内で見直し、小学校とも共通理解できるようにし、幼小接続期のカリキュラムの改変に向けて具体的に始動する必要がある。
A 学校運営(教育課程を支える諸条件)	1. 経営・組織		○大規模改修中も、安全な経営に努めた。 ○分担して行うことが増えてきているが、共通理解すべきことは、時間をおかずに分かりあえるような工夫が必要である。
	2. 出納・経理		○副園長のチェックの手順を増やし、会計記録として学校部に保管する体制を確立し、システムとして改善された。 ○園児数の削減で徴収額を増額したことへの評価を年度末にする必要がある。
	3. 施設・設備		○生活しながらの大規模改修のため引越しを何度もしたが、物品、書類の精選・整理等の機会にもなった。 ○改修に伴い環境変化を余儀なくされたが、限られた空間の中でより過ごしやすくなるよう新しい空間構成を考え工夫し、安全な充実した子どもたちの生活を最大限保障できた。
	4. 健康		○スクールカウンセラーと連携して、保護者対応に臨めたケースが増えてきた。 ○学期に1回スクールカウンセラーとの話し合いの会をもち、個々の子どもの課題を見つめ直すことができた。
	5. 安全		○避難訓練を月1回行い、反省・改善を重ねてきた。回を重ねるごとに教員が連携して動けるようになり、子どもたちも避難時の行動の仕方が定着した。 ○引越し等の作業が入り、定期の安全確認は回数で確保できなかったが、改修で積年の課題事項が改善された。
	6. 情報		○情報担当の教員の対応で管理できているが、担当者以外も共通理解を進めていく必要がある。 ○今後HPに現在整理を進めている本園の歴史資料についても掲載して、社会貢献につなげていきたい。
	7. 開かれた学校		○筑波大学附属特別支援学校との交流を積み重ねることができた。 ○改修工事の関係で公開保育は1回の実施となった。その他の日程で可能な範囲で参観を受け入れ、本園の保育について発信した。
	8. 入園検定		○幼稚園説明会を初めて開催し、979名の参加者があった。事前に入園希望者に園の教育内容等を知らせることができた。 ○幼稚園の検定は、事務の煩雑さが少なくなるような工夫、期間の短縮を目指して、保育時間の確保に努めていく必要がある。
	9. 保護者との連携		○毎日の保育の様子を掲示し保護者に伝えることに努めた。保護者と気軽に話ができる関係作りや話をする時間の確保に努め、さらなる保護者の信頼感・安心感につなげていきたい。 ○1学期・3学期の面談に加え、2学期にも面談を実施するように改善していきたい。

B	大学との連携	1. 連携研究	○園内研究会に本学の大学の教員に継続して参加してもらうことができ、視点が広がり、研究に厚みが生まれた。 ○ECCELL主催のサマーセミナーに幼稚園として事例提供した。 ○大学と連携して、気仙沼市の幼稚園を訪問し視察・交流した。
		2. 授業交流	○大学の授業「保育臨床実習」は、記録の提出、観察後の話し合いが定着し、互恵的になってきた。 ○高校2年生の「保育」参観協力も4年目となり、定着してきた。
		3. 教育実習	○大学生、大学院生10名（4週間）を受け入れた。 ○後期の実習の時期を変えたことは、実習の充実ということにつながっている。 ○実習期間中に避難訓練を実施したのは、安全指導の一環として良かった。
		4. 専門委員会	○職員会議で、各委員会の報告をすることで、共通理解が進んだ。 ○入試専門委員会では各附属の入試の方法やポリシーを出し合い相互理解することができた。
		5. 大学の講義担当	○保育指導法の授業や大学の授業協力で、実習的な体験を幼稚園の保育室でしたり、映像等の資料を活かして、子どもたちが日々感じたり、考えたり、表現したり、協力し合ったりする姿を具体的に語ることで、子どもの生活に即した学びができるようにした。
		6. インターンシップ	○希望者はいたが、時間の関係で受けることができなかった。
	社会貢献	1. 参観・研修受け入れ	○保育参観・施設見学者延べ人数約200名（海外50名 国内150名）を受け入れた。 ○国立の附属教諭の参観もあり、保育後の話し合いも相互に意味があった。 ○参観は基本的には受け入れていく方向で考えるが、保育に支障のないようにし、こちらにとっても有意義な交流にしていきたい。
		2. 公開研究会開催	○今年度は年1回の開催になった。日本全国から約80名の参加者があり、幼児教育の在り方について学び合うことができた。 ○研究の上でも、保育内容充実の上でも保育公開を複数回実施することは重要なことであると感じた。
		3. 現職研修	○現職研修「ラウンド・テーブル」に参加することは、自分の保育について振り返るよい機会となり、他職種の方と知り合い、率直に意見を交わすことができ、有意義だった。
		4. 途上国支援	○中央アフリカのJICA研修は、回数を重ね、子どもたちの教員も自然に交流、学ぶ機会になった。
		5. 出版活動	○本園の教員が協力した文部科学省の指導資料が刊行された。 ○大学と連携して、お茶大子ども学実践研究Ⅰ「表現の生まれるところ」が刊行された。 ○3月に研究紀要を作成し、各教育機関に配布し、全国に向けて発信した。具体的な事例に加え、写真を多数掲載して見やすく、理解しやすい資料作成に努めた。
		6. 各種研究会への協力・支援	○保育学会自主シンポジウム（幼小連携）、ポスター発表、ECCELLサマーフォーラム事例提供をおこなった。 ○第59回全国附属幼稚園教育研究集会で事例発表をした。 ○「幼児の教育」季刊になって3年が経ち、編集委員を中心に紙面充実に貢献した。
		7. その他	○非常勤講師、旧職員の協力で歴史資料の整理が進んだ。140周年に成果の1部が示せるとよい。 ○歴史資料のよりよい保管場所や方法などについて、検討する必要がある。

平成25年度学校評価（自己評価）まとめ（課題）

<教育課程>

・全職員で連携を密にとり、研究テーマにかかげた「探究力」を子どもたちが発揮するような教育実践をすすめることができた。

<園運営>

・園舎の大規模修繕に取り組み、工事中も安全で充実した子どもたちの生活を最大限保証した。歴史的建造物の復元、維持とともに、教育活動の充実につながる改修が実現できた。

・幼稚園説明会を初めて開催し、園の教育内容等を説明する機会をもった。

<大学との連携>

・特別経費による研究を大学と附属校と連携してすすめた。ECCELL主催のサマーセミナーに幼稚園として事例提供した。大学と連携して、気仙沼市の幼稚園を視察し、交流を深めた。

<社会貢献>□

・公開保育を実施し、全国から参加者と保育の在り方について協議を深め、研究内容について発表した。

・大規模修繕の引越の際にでてきた資料を含め、本園が所有する歴史的価値のある幼児教育に関する資料整理を着実に進めることができた。

・今年度の研究成果をまとめた紀要を発行し、本園の教育、研究について広く発信した。